

哲学歴史学科

哲学コース

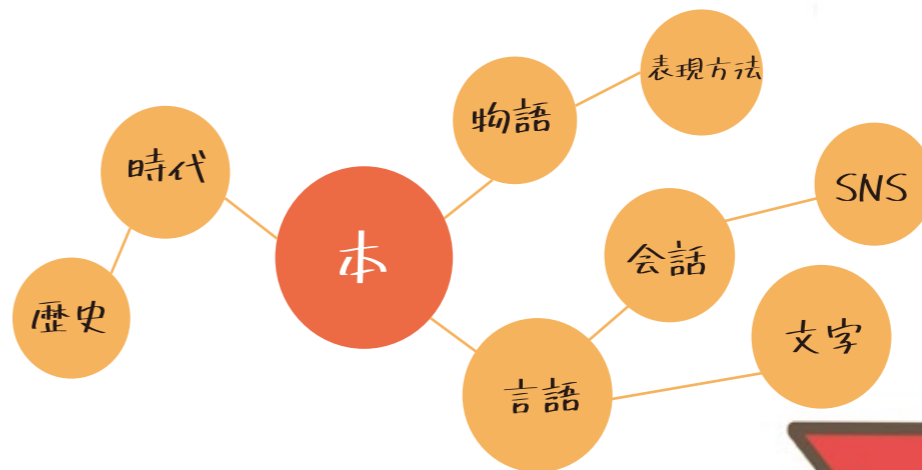
Philosophy

コース（領域） 選択制度について

大阪市立大学文学部では、2回生から学科・コース（領域）に所属します。コース（領域）の決定方法は、「志望・選抜方式」です。教員による2回のコースガイダンスと個別ガイダンス・学生による2回のコースガイダンスを踏まえ、自分の興味・関心にあったコース（領域）を選択します。12月に志望届を出し、定員数などに関する一定のルールにしたがって、コース配属が決定されます。学科・コースの定員数を超過する志望があった場合は、原則1回生前期の成績順による選抜が行われます。

コースの選択においては、研究テーマだけでなく問題意識やアプローチも重要になります。たとえば、下記の図のように、「本」というテーマを1つ取り上げても、本の中の物語に興味があるのか、本の出版された時代背景に興味があるのかで、表現方法からアプローチするのか、歴史からアプローチするのかが変わります。

1つのテーマでも、多くの視点から様々な研究が可能です。



大阪市立大学文学部では、すでに興味がある分野のある人は、自分の興味がどのコースで勉強できるのかということを知るために、興味が定まっていない人は興味を定めるために、1回生から入門的な授業を受けます。そして、上記の図が示すような多角的視点を得て、1年間をかけてじっくりとコースを選ぶことができます。

次のページから、
コースごとの紹介です！



「本」文学部らしいテーマですが、実は文学部は本を読むだけの学部ではありません。その多様さを、この冊子でぜひ感じてください。

哲学コースについて

有意義に問いが立てられる限り、ことなまで理屈で考える、それが哲学という営みです。知識や存在についての根本的研究、倫理、宗教、芸術についての原理的考察などが哲学の中心的テーマですが、そこで扱う問題は多岐にわたります。哲学は今も昔も、複雑に絡み合った思考のものを解きほぐし、新たな世界観の提示と有益な概念の創出を試みてきました。こうした知的努力の成果を広く深く学びつつ、それと同時に、現在の状況における重要な諸問題に対して、別の角度から光を投げかけることが哲学に課された使命です。

先生の研究



准教授 佐金 武 先生

私が専門とする研究テーマは（哲学的）時間論です。時間とは何かという大きな問題に対して一定の答えを得るために、「時間が経過するとはどういうことか」、「過去と未来はどのように異なるのか」、「なぜ今しか存在しないのか」といった、様々なリサーチ・クエッションに取り組んでいます。その他にも心の哲学、言語哲学、認識論などにも関心を持っています。最近では、ユーモアと笑いについて哲学的な考察を試みています。「ヒトはなぜ笑うのか。誰も私に問わなければ、私は知っている。しかし、誰か問うものに説明しようとする、私は知らないのだから。」これはかつて、アウグスティヌスが時間に関して自問した有名なセリフのパロディです。

木戸さんへのインタビュー

○コースを選んだきっかけ
倫理や現代文など高校の授業で取り上げられていた倫理的なことが好きで、哲学コースを志望しました。哲学は本や論文を読みながら自身で思索を深めていく部分が多く、そこが自分に合っていると思いました。

○コースでの学び
哲学史の流れや哲学の理論を学んだ上で議論を深めていくというのが、このコースの基本的な学びです。演習・講読においては、文献を精読し、受講生それぞれが自分の考えについて議論します。授業の他にも、先生や院生の方が主催する勉強会や読書会、哲学カフェがあります。

※2019年度時点

教員紹介

仲原 孝 教授 Takashi Nakahara
宗教学。宗教哲学。カント、ニーチェ、ハイデガーを中心とする近現代ドイツ哲学の研究。
『ハイデガーの根本洞察』（昭和堂、2008）

高梨 友宏 教授 Tomohiro Takanashi
ドイツ近現代美学、近代日本の芸術論。
『西洋近現代美学の概観』加國尚志・平尾昌弘編著『哲学の眺望』（見洋書房、2009）

土屋 貴志 准教授 Takashi Tsuchiya
倫理学（道徳哲学。とくに、倫理学基礎論、医療倫理学、人権論、道徳教育論）
論文「倫理学するのに倫理思想研究は（なぜ、どこまで）必要か」関西倫理学会『倫理学研究』48号（2018）

佐金 武 准教授 Takeshi Sakon
英語圏のいわゆる分析哲学の文脈において、現代時間論および関連する形而上学の諸問題を中心に研究。
『時間にとって十全なこの世界—現在主義の哲学とその可能性』（勁草書房、2015）

卒論タイトル例

- ◆人はなぜ悲しい音楽を聴くのか～ポップカルチャーと音楽の哲学～
- ◆スピノザにおける実体と神
- ◆様相に関する規約主義はいかにして擁護可能か

哲学コースにとって「物語」とは？

人は誰もが自分の物語を生きているように見えます。それは「人生」と呼ばれる物語なのですが、いくつかに興味深い問題があります。第一に、誰にとっても自分の人生こそがその物語のすべてである一方、それが多くの物語の一つにすぎないことにも我々は気づいています。全体としての世界からみれば、一つひとつの物語は浮かんでは消えるサイダーの気泡のようなものにはすぎません。そんな物語がどうしてそれほど重要なものなのでしょうか。第二に、人生という物語にとって、その「形」は非常に重要であるように思えます。生涯を通じて幸福の総量が同じでも、その形が違えば、ハッピーエンドにもバッドエンドにもなりません。それはなぜでしょう。第三に、自らの人生においてたった一人の主人公が登場すると我々は考えがちですが、それは本当でしょうか。「物語的自己」などというものは実際には、たとえば、物体の重心と同じように、単にパーソナルな存在にすぎないのでは、ないでしょうか。そうでなければ、それは一体どこに存在するのでしょうか。（文・佐金先生）